

木場七職人

細田木材工業(株)

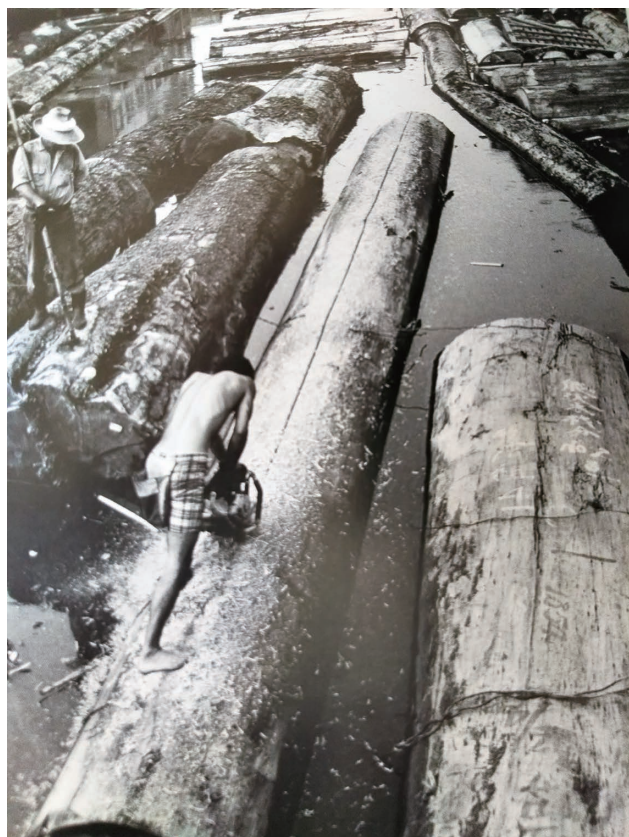
顧問 細田安治

木挽き

かわ 川木挽き

製材職人とは超高級銘木を曳く木挽きを言う。その前に銘木とは言えないまでもラワンなど外材丸太の大径木の胴割り、長尺丸太の玉切りなどをする木挽きさん（以下敬称略）を紹介する。

外材専門の木挽きのなかでもそれぞれの専門分野がある。大きくはラワンなどの大径木の乱尺を定尺に切る横切り、製材機にかからない大径木、60インチの大バンドでもせいぜい三尺五寸約1.5m、工場によっては60インチに下駄をはかせる、専門用語では「ふところを大きく」次は台車の問題、木台とマスト、ハッカ（木つかみ）を特注して一回り大きな設備をする。この特注製材機は費用がかかるが、太い丸太を芯から製材することが出来るため製材屋の「売り」になっていた。それでも芯から胴割できない超大径木は、木挽きを頼むことになる。横切り丸太の木挽きさんとはランクが上の技術と体力を持っている木挽きでなければできない仕事だ。



長尺材を製材中の木挽き



大径木を挽き終わった木挽



横切り中鋸挽き

おか 陸木挽き

銘木木挽きは、^{おか}陸挽きつまり陸上で、しかも原木を持ち上げたり転がしたりできる設備のある場所でなければ仕事ができない。この木挽きは「銘木木挽き」と言われ、杉、ケヤキ、桧などの大径木から天井板用の盤、床板用の盤を引き出す木挽きだ。この木挽きが木場7職人の最高位にいる木挽きと言えよう。銘木木挽き、陸（おか）挽き専門の木挽きさんだ。名人と言われた林以一さんがいる。この木挽きさんは、墨一つで値打ちが変わる木挽きの名人として銘木市場に出入りし銘木屋さんの良きアドバイザーとして活躍された人で、本も出されている林名人をさわりご紹介する。

林以一名人 最後の江戸木挽き職人であり題名はそのものずばりの「木を読む」で紹介されている。小学館から1996年（平成8）に発行され、その後再版を重ねているが、木場の方はご存じの方が多い、現在後継者は林組の東出長陽さんが黙々と技術を引き継いでいるが、残念ながらこの技術は「木材や」の間でもあまり知られていない。少しでも木を読む技術の伝承をと思い名人の一端をご紹介する。まず何故手挽か？筆者は製材屋の息子、創業者の先代は「自分」のことを「機械の木挽き」と言っていたことを記憶している。「機械の木挽き」と表現するほど木挽きの存在が強烈だったと思う。

何故製材機や機械鋸のチェーンソーがダメかと言えば、「木の決め手は木目の美しさと色艶であり、決めては樹脂、脂は製材機の高速回転により樹脂が熱で溶けて台無しになる。

1. 美しい木目が摩擦熱で「ほう」としてしまう。美しい模様も、色艶も変わってしまう。
2. 製材機は高速で木の繊維を「むしり取る」ように鋸歯が進む。むしられた板はもう一度仕上げ鉋で削りなおさねばならない。

つまり無駄が出る。銘木板が何枚分もオガ屑になってしまう。手鋸挽きにはこのような無駄がなく色艶も自然のまま挽きだすことが出来る。木挽きの手挽きの板は仕上げしなくてもそのままテーブルなどに使える。最低薄板は1分（3ミリ）まで挽くことが出来る。ところで縁は異なるもの、この林名人は、筆者と同じ旧制中学都立三商の同窓生であることが判った時は、林さんに、ご挨拶にいき同窓会へ出てきて「名人の話を聞かせてください」とお願いしたが、「自分はその位に在らず」と断られた。この時は働き盛り、残念だが、仕事一筋に打ち込み、後世に技術を残すのではないか。筆者は、はっきり覚えている。

三商の「木材や」の卒業生が集まって「木鐸会」と称する会を作っていた。1期の大先輩である亀井清蔵さんをはじめ、卒業の期は、今思いだせないが、材商の副理事長を勤められた四倉さん、木場の榎戸勇さん、堀貫木材の経理を長く勤められた山崎さん、木場三丁目のラワン製材青木さん、本所の杉材専門やさん、両国の鰻屋蜷川さん、筆者が勧誘した19期卒では江東区議員・佐貫屋の川名省三、新大橋の誉ソースの木戸隆吉、三進木材の岩瀬さんなどである。会長は亀井さん、会計・世話人山崎さんなどで、年数回の会合、新年会、忘年会、花見会、旅行会などをしていた。



最後の江戸木挽き林以一さん向かって左

木鐸

「木鐸」とは、木の舌を持った金属製の鐘。古代中国では、鐘を鳴らし人々を集め政令などを交付した。八佾「論語」では、「天下これ道なきや久し。天まさに、天子を以て「木鐸」となさんとするごとし」などとあるように、これから転じ、世論を喚起し、民衆を教え導く人物をなぞらえる言葉となった。木鐸会のメンバー会長の亀井さんを始め、発足時から木場の「木材や」では一目も二目も置かれる存在であり、「木材や」論客として、「我こそは世の中の人々を目覚めさせ、正しい道へと導く者なり」であったであろうと推測する。尚余談だが、舌も金属製のものは金鐸と言って、軍事に関する件の布告に、用いられた。この会へ林さんを入会させたかったが、「意が通ぜず」今でも残念に思っている。もっともこの会のメンバーは、製材、問屋、小売りが主体で、上の方は問屋であったため銘木には関心が薄かった。だが残念だ。林さんが入会していればもっと盛り上がり、会も更に活性化し、世の中にもひいては都立三商にも貢献できたのではないか。お付き合いがいかに大事かを痛感する。ここに、亀井さんの没後会長をされていた「木好会」亀井さんをしのぶ短歌を紹介しご冥福を祈念する。

以下文宛短歌

- ・深川と木場を愛して木に惚れて翁のごとく浄土に旅たつ
- ・これからは東木協の月報に木場好人の物語なし
- ・上木場の旅行宴会亀井節木場シャンソンは二度と聞かれぬ
- ・逢う度に元気印の亀さんと呼びし先輩今宵浄土に
- ・数々の功績残し世を去りし輝く巨星永久に讃えん

荷揚げ人足

川並、筏師、木挽きと続き、次の木場職人として荷揚げ人足をご紹介します。

伝馬船は製品になった角もの、板もの、小割ものを運んでくると、川や堀に面した木材問屋に横付けにする。各問屋には水面に面して岸壁には荷揚げ用の取り入れ口がある。普段は取り外しできる板で仕切ってあるが荷揚げの時は板を外し、伝馬船から揚げ「あゆみ板」(建築現場の足場板のような板)を往復の二枚を渡す。幅一尺、長さ三尺三寸の板(長さはいろいろある)。この取り入れ口は今でも当時の問屋の護岸をよく観察すると取り入れ口と思しき跡が残っている。余談だがその昔といっても昭和30年代まであった米問屋の佐賀町の倉庫街、にも前記の取り入れ口と思しき跡がある。

汐の干満との競争堀に面した材木倉庫に横付けされた舟から、人力で材木を運び上げる人足。荷揚げ人足たちの潮の干満との競争が始まる。潮が満ちている時間は船と陸地が並行なので平地を歩くようなものだが、潮が下げてくると船も同時に下がり平地へは上りになる。つまり上り坂を担いで上がるわけだ。こんな大変な仕事も少ない。昔石炭の荷揚げ荷下ろし日野葦平の「花と龍」にてでくる金井金五郎とおまんの物語を思い出す。潮の干満での荷揚げ荷下ろしの作業の苦労話が出てくる。正に「花



木好会亀井清蔵氏写真前列中央

と龍」の世界の苦勞である。箱根駅伝でいえば往路の最終山登りと同じだ。駅伝は平地の走者と山登りの走者は別人だが、荷揚げ人足達は交代がいない。自分で山登りまでしなくてはならぬ。しかも幅1尺の「あいび板」を落ちないように登る。石幾らの請負だが力持ちと敏捷さ身の軽さが条件の大変な作業だ。「あいび板」とは木場らしい言葉だ。

以下は前号でもご紹介した川並Kちゃんのご紹介である。

・荷揚げ人足。伝馬船で材木(製品になったもの)を運んでくると、堀に面した岸壁に横付けにする。各材木屋の堀に面した所には、荷揚げ用の取り入れ口が切っており、伝馬船からそこへと「あいび板」と呼ぶ板を渡すんだが、幅一尺、長さ三尺三寸の板をまともに渡すと坂になっちゃう。人力で運び上げるわけだから、あんまり坂になっちゃうときついんですよ。それで、岸壁の取り入れ口を荷揚げ用に、伝馬船よりも少し低くした場所を作っておくんです。そうすれば勾配ができて材木が取り入れやすくなる。このように、木場の町はすべて木材の商いを中心にして、考え抜いて作られていたんです。



荷揚げ用の取り入れ口、普段は板で閉めてある

お詫び 本号迄数回にわたり木場職人を紹介してきた。川並、筏師、荷揚げ人足と三職人まででそのあとに続く船頭、馬方、結束屋は紹介しきれずでした。次号以下チャンスを見てご紹介します。

ドロッカーのご紹介

今号から巻末に、経営学者P・F ドロッカーの名言をご紹介したいと思います。一緒に勉強させてください。

筆者はドロッカー教の信者です。名言の一部をご紹介しながら、読者の皆様方と共に勉強できれば幸いです。

◇ドロッカーは「企業の目的は顧客の創造である」企業が顧客を創造するマネジメントのポイントは「マーケティングとイノベーション」の二つと言う。

1. マーケティングとは顧客のニーズを探って満たすこと。「顧客の必要なものを提供」すれば、企業が商品・サービスを売り込まなくても、自然と企業と顧客の販売サイクルが生まれる。販促活動を不要にすることが、マーケティングの最終到達点だ。つまり、「これを買ってくれ」ではなく、「これを売ってくれ」がマーケティングの基本である。
2. イノベーションとは、今までとは違う「商品やサービス」つまり新しい価値の提供によって顧客に満足感を与えることだ。「技術の進歩によってイノベーション」が起きることもあれば、「同じ商品・サービスを別目的で利用することでイノベーション」が起きることもある。
3. マーケティングとイノベーションは、どちらか一方だけで充分というわけではない。

続く